

あなたの知らない普通種

おおにし わたる
大西 亘(学芸員)

“普通種”とは

“普通種”とは何でしょうか？ 明確に定義された言葉ではありませんが、主に生き物好きの人たちのうちで「身の回りにふつうに見られる生き物」のような意味として用いられる言葉です。

普通種のイメージ

普通種と聞いて、思い浮かぶ植物を10ほど挙げてみて下さい。筆者の周りの人たちに聞いてみると、ハハコグサ、オオイヌノフグリ、ホトケノザ、タンポポ(類)、ハルジオン、カタバミ、セイタカアワダチソウなどの名前が挙がりました(図1)。近年目にする機会が増えたナガミヒナゲシやヒメツルソバを思い浮かべる人もいでしょうか(図1)。ただし、“身の回り”や“ふつうに”の感覚には個人差がありそうなので、もしかすると言葉を使う人によって、普通種としてイメージされる範囲が変わることもあるかもしれません。そこで、実際に生育する植物について、博物館の標本記録の有無を場所ごとに調べ、客観的に“普通種”と言えるものを確かめてみたいと思います。ここでは、網羅的な標本記録から私たちの身の回りでふつうに見られる植物(自生する草花や樹木)の実体を探ります。

標本記録でみる客観的な普通種の姿

神奈川県下では、神奈川県植物誌調査会による『神奈川県植物誌』のための調査が1979年から2017年の間に3回実施されており、自生する植物について全県網羅的な標本記録が存在します。そのため、神奈川県内については、植物ごとに県内各地における標本記録の有無を参照することで、「身の回りにふつうに見られる植物」を客観的に知ることができそうです。

『神奈川県植物誌 2018』に引用された標本情報(1979年から2017年に採集されたもの)を元に、県内の60市区町村(区は政令市のもの)それぞれで記録された植物(3,300種超！)について、記録された市区町村数が多い順に並べたグラフにすると図2のようになりました。



図1. 普通種としてイメージされる身近な植物。(上段左から)ハハコグサ、オオイヌノフグリ、ホトケノザ；(中段左から)タンポポ類(写真はセイヨウタンポポ)、ハルジオン、カタバミ；(下段左から)セイタカアワダチソウ、ナガミヒナゲシ、ヒメツルソバ。

横軸に植物を、縦軸には記録された市区町村数が示されています(横軸のラベルに示された植物名は代表的なもののみ)。グラフを見ると、“普通種”に関連して分かることがあります。(1)出現した市区町村の数で並べると連続的です。つまり、どこを境目にしても、普通種とそうではない植物の境目は、はっきりしたものではありません。例えば9割の市区町村で見られるなら普通種と呼ぼう、といった決め方もできますが、8割の市区町村で見られる植物との間に、植物としての違いがあるわけではありません。グラフからは別のこともわかります。(2)約70%の植物は、全体の半数(=30)以下の市区町村でしか記録されていません。神奈川県内の全て、あるいはほとんどの市区町村で記録されている(=多くの人にとって普通種と感じ

られるだろう)植物がある一方で、県内の半分以上の市区町村には生育していない植物が、神奈川県で見られる植物全体の約70%もあるのです。

普通種のイメージは正解？

さて、上で挙げた「身の回りにふつうにありそうな」10の植物は、実際にそれぞれのくらい記録があったのでしょうか。ハハコグサ、ハルジオン、カタバミの3種は、全60市区町村で記録されていました。オオイヌノフグリ、ホトケノザ、タンポポ(カントウタンポポ)、セイタカアワダチソウは、それに次ぐ59市区町村で記録されていました。近年分布を急拡大した外来植物のナガミヒナゲシとヒメツルソバは、それぞれ54市区町村、52市区町村でした(ただし、実際の生育状況よりも記録が十分でない可能性が考えられ

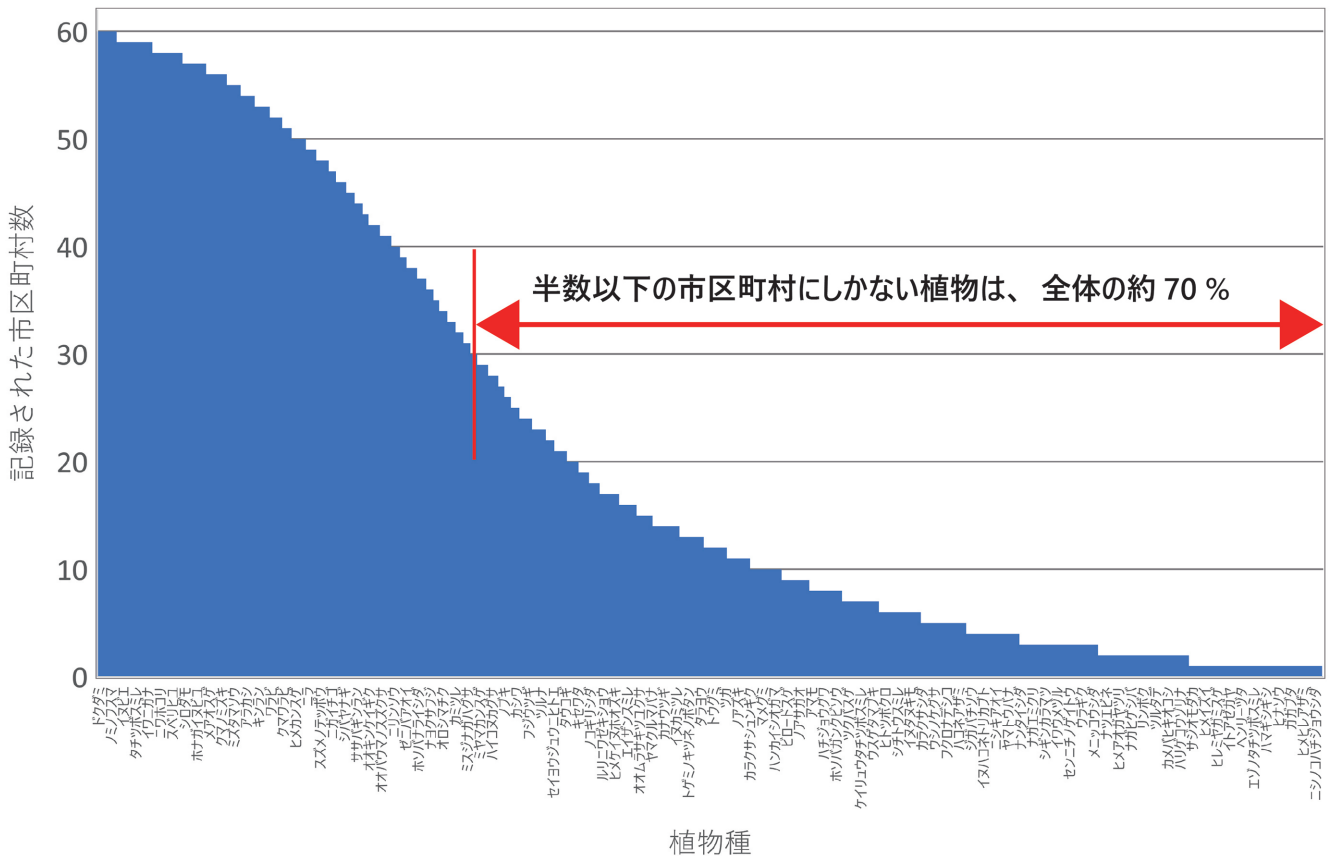


図2. 植物種ごとの記録された市区町村数. 横軸は記録のある植物(3,000種超の植物のうち代表的なもののみ機械的に表示), 縦軸は記録された市区町村数を示す.

ます)。まとめると、多くの人が普通種とイメージする植物は、実際の記録の上でも普通種と言えそうです。

名も知らぬ普通種

県内の全市区町村(60)で記録された植物名を見てみましょう。ドクダミ、ネジバナ、ツユクサ、クサイ、スズメノカタビラ、カニツリグサ、オニウシノケグサ、トボシガラ、カモジグサ、ヌカゴ、イチゴツナギ、コブナグサ、アキメヒシバ、ススキ、アシボソ、ムラサキケマン、ミツバアケビ、センニンソウ、ツタ、ノブドウ、フジ、ヤブヘビイチゴ、ケヤキ、エノキ、ヤマグル、カタバミ、コニシキソウ、ゲンノショウコ、イヌガラシ、イヌタデ、イタドリ、ノミノフスマ、オランダミミナグサ、アカネ、ヘクソカズラ、オオバコ、クサギ、トキワハゼ、ハハコグサ、フキ、ハルジオン、オオジシバリ、ヨモギ、ヒメムカシヨモギ、ハキダメギク、アメリカセンダングサ、ニワトコ、スギナの48種が該当します(下線は普通種として名前の挙がった植物)。これらの植物は、記録状況からまさに普通種と言えるはずですが、

すべての植物が読者にとって、その名前から姿を思い浮かべられるほど親しみがあるわけではないのでしょうか。つまり、明らかに「普通種」と言える植物の中でも、名前や姿がたちが広く認知されている植物はそのうちのごく一部に限られ、それ以外に決して少なくない数の、名前や姿が知られていない普通種が生育していることになります。

ところ変われば、普通種も変わる？

さて、ここまで県内に広く見られる植物の視点で普通種を見てきました。ただし、実際には、植物はそれぞれに適した環境に生育しています。例えば海岸でよく見られる植物の多くは、山林では見られません。あるいは、街中や人里の路傍^{ろぼう}に生えている植物はその多くが外来種ですが、山林では外来種は限定的です。こうしたことから、横浜市、三浦半島、丹沢といった特定の地域や、海岸・山林・農地・都市といった特定の環境など、特定の地域や環境に絞って、その地域や環境で「身の回りにふつうに見ら

れる植物」に目を向けると、地域や環境によって普通種の構成には違いがあるかもしれません。外来種が多い人里や都市の環境では、同じ場所でも年代によって普通種の顔ぶれが変化している可能性もあります。このように、切り口を変えれば見えてくる普通種も変わることでしょう。

現在開催中の企画展^{スーパー}「超普通種展—自然史研究を支える主役たち—」(開催期間 2023年2月18日～同年5月7日)では、植物だけでなく、様々な生物の“普通種”について、スポットライトを当て、紹介しています。普通種は身の回りにいるからこそ、私たちに最も親しみがあり、私たちの自然観に大きな影響を及ぼしています。また、広く見られるからこそ、その構成の変化などから自然界の異変を感じ取ることもできます。

生き物が活発になり、だんだんと屋外でも過ごしやすくなるこの季節、ぜひ企画展をご覧になって、“超普通種たち”を探しに自然の中へ出掛けてみて下さい。